

シンポジウム「ロシア革命前における仏露関係」(2011年12月16日)

露清銀行と露亜銀行の設立 ——フランスとロシアの協調と軋轢——

篠永 宣孝

はじめに

19世紀中葉以来精力的に進められてきたフランス商工業による極東（中国）市場進出は、フランス政府（外交）のイニシアティブや手厚い保護・支援があったにも拘わらず、当初期待したほどの成果を上げることはできなかった。そこにはフランス特有の問題が多々見られたが、そのなかでも差し当たり焦眉の急とされたものは、中国・極東におけるフランス固有の銀行の欠如の問題であった。確かに、フランス第一の海外銀行であったパリ割引銀行〔Comptoir d'Escompte de Paris, CEP〕は1860年代からアジアに多くの支店を開設していたが、1889年のCEP破綻後再編されたパリ国民割引銀行〔Comptoir National d'Escompte de Paris, CNEP〕はアジア・極東市場からの撤退を開始していた。また、1875年にインドシナを拠点とするインドシナ銀行〔Banque de l'Indochine, BI〕が準国立銀行〔banque quasi-officielle〕あるいはコンソーシアム銀行〔banque consortiale〕としてパリの大銀行によって設立されていたが、当該銀行は、設立当初から東アジア（中国）への進出に「リスクが大きく、採算が合わない、競争が激しい」として概ね否定的であった。このような事情から、フランス政府（外務省）は、アジア・極東市場への経済進出を促進しフランスの影響力（プレザンス）を扶植するために、フランスの豊富な資本蓄積（資本輸出）を最大の武器〔arme financière〕として活用する政策を積極的に推進することを企図した。それには何よりもまず、極東・中国市場で活動・展開するフランスの戦略的銀行（国策的銀行）の設立がどうしても必要とされたのである。とりわけ日清戦争後、日本も加担した列強による極東・中国への帝国主義的進出が熾烈化してゆくなかで、列強諸国は極東・中国市場にそれぞれ強力な銀行——イギリスは香港上海銀行〔Hongkong and Shanghai Banking Corporation, HSBC〕やチャータード銀行〔Chartered Bank of India, Australia, and China〕、ドイツは独亜銀行〔Deutsch-Asiatische Bank〕、日本は横浜正金銀行〔Yokohama Specie Bank〕——を擁していたがゆえに、フランスにも同様の強力な銀行をもつ必要性が一段と強調されるようになった。つまり、フランス政府はフランスを代表する金融機関（銀行）を中国に創設して、フランス経済進出の梃子にしようと構想したのである。

1 露清銀行の設立と発展

(1) 露清銀行の設立

丁度その時、中国の日清戦争敗北に乗じて中国北部への侵入を構想していたロシア蔵相ウィッテによる銀行設立〔露清銀行〕の計画が、フランスにもたらされることになった。

对中国借款におけるフランスとロシアの銀行グループの協力が契機となって、借款の発起人であったロシア蔵相ウィッテは、1895年6月の対中国仏露借款引受銀行シンジケートの幹事であったオッタンゲル商会（パリの有力オート・バンク）のジョゼフ・オッタンゲル〔Joseph Hottinguer〕に、「中国において、フランスとロシアの利益を金融的にも商業的にも擁護・発展させるのを目的とする銀行を設立するならば、実り多き成果が得られるであろう」との考えを表明し、露仏政府後援のもとに銀行を創設することを求めた。この構想がフランスとロシアの銀行グループに大いに歓迎されたので、ウィッテはA. ロツタン（サンクトペテルブルク国際商業銀行支配人）とEd. ネツラン（パリバ取締役）にその速やかな実現を要請した。彼らは、中国での早期の営業開始と顧客の確保を考慮して、上海に新銀行設立を検討していたパリ国民割引銀行に、同行上海支店を譲渡するよう申し入れた。パリ国民割引銀行は、結局「フランスの影響力拡大に貢献する強力で友好的な銀行と競争する」よりも、上海支店を譲渡する代償に新銀行の株式の譲り受けことと「他の創設銀行と全く同一条件・資格での新銀行への参加」を条件に、彼ら（露清銀行創設者）と協調する途を選んだのである。

かくて、1895年12月にロシア政府によって銀行定款が承認され、ロシア政府後援の下に、露清銀行〔Banque Russo-Chinoise〕が1896年1月9日にサンクトペテルブルクに設立された。設立の主たる目的は、ロシア・中国間の大規模な商取引、極東ロシア領での商工業の活性化、シベリア鉄道建設の完成、などを準備し組織することとされた。創立資本金は600万ルーブル（2400万フラン）とされ、額面125ルーブル（500フラン）の株式が4万8000株発行された。Ed. ネツランによると、2万8000株（58.3%）はパリで一般公募されずに、一括して対中国借款契約に参加したパリバ、クレディ・リヨネ、パリ国民割引銀行、オッタンゲル商会（オート・バンクを代表して）によって引き受けられ、それぞれの取引銀行や顧客に売却された。残りの2万株（37.5%）は、同じく対中国借款契約に参加したロシア銀行グループ（4銀行）によって引き受けられた。

(2) 露清銀行をめぐる露仏間の軋轢

フランスはこの銀行の資本金の過半〔約6割〕を出資し、フランスの極東・中国での利益を代表する金融機関の一つとして利用しようと考えていた——フランス政府は、フランス資本をロシアの極東政策〔極東進出〕に利用しようとするウィッテに極めて警戒的であった——。ところが、フランス側が設立資本金のおよそ6割を出資していたにも拘らず、経営陣（創立取締役会）は5名のロシア側（人）取締役（le prince Oukhtomsky, A. Rothstein, P. M. Romanoff, Th.

Notthafft, A. D. Startzeff) と 3 名のフランス側（人）取締役 (Ed. Noetzlin, J. Hottinguer, A. Chabrières) によって構成されており、頭取にウフトムスキー公爵、代表取締役に A. ロツタンが就任して、当初からロシア側が圧倒的に優勢であった。

露清銀行は創立当初からロシアの銀行としての特徴を保持し、次第にロシアの国策的金融機関としての性格を露にするようになった。1897年から1898年にかけてロシア政府が露清銀行株を買い増しすることによって、露清銀行のロシア化が益々進展して行くこととなった。ケ・ドルセ(フランス外務省)は、露清銀行の名称をパリ=サンクトペテルブルク銀行 [Banque de Saint-Pétersbourg et de Paris]、極東仏露銀行 [Banque Franco-Russe d'Extrême-Orient]、露仏清銀行 [Banque russe-franco-chinoise] に変更すべきであり、銀行の経営陣・取締役会におけるロシア人とフランス人の間の平等な待遇（同等の役員数）を求めるべきであるとして、銀行のフランス化を図ろうとして執拗に介入を行ったが、露清銀行は容易にフランスの思惑通りにはならなかった。そこで、同盟国フランス政府の不満を和らげるために、ロシア側〔ウィッテ=ロツタン〕は、露清銀行を二分割して、フランスのための仏清銀行を新設することを提案した。しかし、ロシア側主導のこの新銀行設立案も、露清銀行によって常に吸収される危険が付きまととの理由で、結局断念せざるを得なかった。このように、中国にフランスの銀行を設立しそれを尖兵として経済進出を図るというフランス政府の方策は、その第一段階から躊躇だったのであった。その最大の理由は、露清銀行の設立、仏清銀行設立計画がいずれもロシア主導で進められ、フランス人による積極的なイニシアティブは見られなかつたからである。

こうした状況から、フランス政府は、1875年に設立されフランスの植民地銀行・「準国立銀行」として順調に発展していたインドシナ銀行に白羽の矢を立てることになる。即ち、フランス政府は、インドシナ銀行と露清銀行との間で中国市場を南北に二分割させて、インドシナ銀行には中国南部への進出・業務の拡張を促す（中国への出店を強要する）戦術に転じることになった。しかしながら、パリの 5 大銀行 (BNEP, CIC, Paribas, SG, CL) が独占支配するインドシナ銀行は中国への業務拡大には極めて消極的だったために、こちらもフランス政府の思惑どおりには進まなかつた。

(3) 露清銀行の発展と試練

露清銀行の発展は、創業と同時に取り掛かった支店・営業所の開設、支店・営業所網の拡充によって明瞭に見て取れる。まず銀行は、1896年始めの上海支店、漢口支店の開設を皮切りとして、中国北部での支店・営業所の速やかな開設に腐心した。その結果、1896～97年に天津、ウラジオストク、北京、パリ、モスクワ、ポール・アーサー（旅順）に 6 支店、牛莊、芝罘、長崎（間もなく支店）、横浜、神戸、ブラゴベシチエンスク、ニコラエフスク、キャフタ、ベルフェウジンスク、イルクーツク、チタに 11 営業所が開設され、営業活動の中心となる中国市場ばかりでなく、シベリアにも一連の支店・営業所網が構築された。翌1898年には、ブラゴベシチエンスク、イルクーツク、牛莊、横浜などの営業所が支店に昇格され、1899年になると、ビチム、神戸、吉林、サマルカンドに支店が開設され、スレテンスク、チチハル [Tsitsihar]、

Kouandchenze、Kalgan（張家口）、ウルガ、コーカンド、カシュガルなどに営業所が設置され、銀行は合計19支店と12営業所を擁するまでに拡大した。義和団事件が勃発した1900年にも支店網の拡充が続き、支店総数は29店舗、営業所総数は4店舗に達した。翌1901年になると、更にハバロフスク、ダルニー（大連）に支店を、クラスノヤルスク、アンディジャン、ブハラ、ウリヤスタイ、函館、Zeiskaia-Pristanに営業所を開設した。その結果、銀行の支店総数は31店舗、営業所総数は10店舗にまで拡充されたのである。

露清銀行創業以来4年間の継続的な発展と支店・営業所網の急速な整備に要した膨大な支出に対処するため、1900年の株主総会で375万ルーブルの更なる増資——額面187.5ルーブルの株式2万株の発行——が決定されたにも拘らず、義和団事件の勃発やそれに起因する株価の下落などが原因で、その発行は延期されていた。だが、1902年にはこの新株2万株の増資が実施されて、露清銀行の資本金は1125万ルーブル（6万株）から1500万ルーブル（8万株）へと増大した。新株発行の度に株主としての地位を高めてきたロシア政府（大蔵省）は、1902年の増資でも一段とその地位を高め、1903年には露清銀行株3万7000株を保有して圧倒的な筆頭株主となっていた。さらに、1907年2月には、露清銀行は、上海支店における手持現金（銀貨）を強化するために、200万上海両〔taëls-Shanghai〕の特別資本金（1908年末評価で225万ルーブル）、即ち額面125上海両の株式1万6000株を発行し、その全額（全株）がロシア政府によって引き受けられた。こうして、露清銀行は名実ともにロシアの戦略的銀行のなったのである。

露清銀行の取引業務（預金・当座勘定、有価証券、コルレス先取引、貸付）は、義和団事件、日本や中国での恐慌（1900-01年）、ロシアでの金融・産業恐慌（1900-03年）、日露戦争（1904-05年）などの影響である程度の増減は見られるものの、ロシア政府の手厚い保護・援助と中国政府による巨額の出資（1896年に500万庫平銀=700万ルーブル）のおかげで、1905-06年に至るまで比較的着実に発展してきたように見える。そうして、銀行の純利益も、やはり義和団事件、日本や中国での恐慌、ロシアの金融・産業恐慌、日露戦争などの影響は見られるものの、概して順調に増大してきたと言えよう——とりわけ、1904～06年の高収益は注目に値する——。したがって、銀行は、1897年に4%、1898年に7%、1899年～1903年に8%、そして1905年、1906年には、それぞれ10%、9%の配当金を支払うことができたのである。

ところが、1907年初頭から開始した「全般的」恐慌——とりわけ、アジア・極東全体での「凄まじい恐慌〔violente crise〕」——によって、露清銀行は大打撃を被り、総売上高を維持するのも容易ではなかった。1907年度に、銀行は722万3000ルーブルもの金額を特別償却金として利益から差し引かねばならなかつたので、当該会計年度は大きな欠損（380万ルーブル）——1907年末に極東を巡察したA. I. プチロフの報告によると、600万ルーブル以上の損失——を計上した。その上、資本の固定化は3000万ルーブル（資本金1500万ルーブルの2倍）にも上っていた。同年度は株主配当金が支払われなかつたばかりでなく、421万6000ルーブルもの金額を特別積立金から差し引かざるを得なかつたのである。1897～1908年間の銀行純利益総計4533万ルーブルのうち、配当金として1520万ルーブル（中国政府への配当金と株主配当金の合計）——つまり純利益の約3分の1——しか支払われておらず、純利益の大部分は不良債権の償

却や損失の補填に使われてきたことを示している。即ち、銀行は不良債権の引き当てのため、1904年度に165万ルーブル、1905年度に135万ルーブル、1906年度に214万ルーブル、1907年度に722万ルーブル、1908年度に174万ルーブル（純益の半分）を純利益から差し引かざるを得なかつたのである。経済不況は1908年度にも長引いたので、露清銀行は、利益がでないばかりか新たな損失が予期される吉林、カルガン（張家口）、ウリヤスタイなどの支店を閉鎖した。こうした状況から、パリ株式取引所上場時（1906年6月14日）に795フラン（額面価格500フラン）であった露清銀行の株価は、その後1906年に766.43フラン、1907年に695.62フラン、1908年には498.10フランと額面価格を下回るまで下落してしまった。

（4）露清銀行再編に向けて

日露戦争後、露清銀行は極めて困難な期間を凌がねばならなかつた。ロシア軍の敗北は極東の大都市での生存条件を一変させ、それによって露清銀行の権威や威光は著しく失われてしまった。銀行の商取引は激減し、支店・営業所によつてはその維持は困難となり、閉鎖が検討されねばならなかつた。支店長による詐欺行為や横領などによる支店・営業所経営の悪化に備えて、銀行は特別償却のために利益から巨額の資金を差し引かねばならなかつた。その上、日露戦争敗北によって、ロシアの極東政策が破綻したばかりでなく、国庫の窮乏が明らかになったことから、ロシア政府は露清銀行の独占的支配から徐々に手を引き始めたのである。日露戦争後、利益の大部分をもたらしていた極東におけるロシア国庫の金融取引が激減してしまつた露清銀行は、ロシア国立銀行の「支店」の地位を喪失することとなつた。日露戦争後の中国で、利益のますます上がらなくなつた漢口の茶取引と貸付業務以外に、堅実で大規模な商取引が消滅してしまつたので、もはやかつての「強大で繁栄した露清銀行の地位を維持するには困難となり」、銀行の将来は大変おぼつかないものとなつた。そこに襲つてきた1907年恐慌による大欠損などで経営危機に陥つた露清銀行は、組織の改編・改革の必要に迫られた。この銀行再編問題を契機に、フランス（外務省）は、再び露清銀行でのフランスの影響力を増強・回復することに腐心した。また、銀行再編・再建の問題も容易に進捗しなかつた。露清銀行の危機的状況は、漢口（買弁の詐欺）、上海（バヴィエ倒産〔faillite Bavier〕）、天津などの支店での欠損や満州（特に、ハルビン）における製粉工場への莫大な貸付金（400万ルーブル以上）の償却などの影響で1908年になつても容易に収まらず、銀行の将来はますます危惧されるようになつたのである。

こうした手詰まりの状況から抜け出す方策として、1909年に入ると露清銀行に、シベリア商業銀行〔Banque de Commerce de Sibérie〕統いて北方銀行〔Banque du Nord〕との合併案が浮上することになるのである。

2 露亞銀行の設立

（1）シベリア商業銀行と露清銀行＝シベリア商業銀行合併案の挫折

シベリア商業銀行は、1872年6月に資本金240万ルーブル（9,600株）の株式会社としてサン

クトペテルブルクに設立された。1905年に資本金は400万ルーブル（1万6000株）に増額され、翌1906年には、額面250ルーブルの株式1万2000株（300万ルーブル）が1株当たり400ルーブルで発行された。発行プレミアムは180万ルーブルに上り、全額積立金〔réserves〕に充てられた。1909年1月28日の株主総会の決定によって、さらに1万2000株が発行（発行価格425ルーブル）され、株式資本金は1000万ルーブル（株式総数4万株）に増額された。150万ルーブルの発行プレミアムは、全額積立金に充てられた。こうした数次の増資によって、シベリア商業銀行は、資本金1000万ルーブルのほか、積立金500万ルーブル、特別積立金130万ルーブルを擁しており、ロシアでは二流であるが中堅の堅実な銀行と見なされていた。1909年の銀行代表取締役はM. A. ソロヴェイチック〔M. A. Soloveitchik〕（シベリア商業銀行創設者の息子）であり、株式資本のマジョリティーはドイツ・ユダヤ資本（特にドイツ銀行）の手に握られていた。事業の順調な発展に支えられて、シベリア商業銀行は、1909年4月までにシベリアや極東、サンクトペテルブルクの金融領域に29支店を開設して、支店網を拡大・拡充していた。だが、銀行の主たる活動の場はシベリアというよりも、むしろヨーロッパ・ロシア、サンクトペテルブルク、モスクワにあった。

シベリア商業銀行は、当座預金、割引、担保貸付の各項目すべてにおいて、露清銀行とは対照的に、ロシアでの金融・産業恐慌（1900～03年）、日露戦争、1907年恐慌などの影響をさほど受けことなく、手堅い経営で業績を順調に伸ばしてきているのが看取できる。それゆえ、1900年代に入ってのシベリア商業銀行の急速な発展は、同様の地方・地域で広く業務を展開していた露清銀行と一部競合することとなった。また、シベリア商業銀行の純利益は、1902～1904年はやや停滞的ではあったが、1905年以後は急速に増大してきた。こうした業績の好調さを背景に、シベリア商業銀行の配当金は、1887年に14%、1888年に13.2%、1889～1896年に14%であったが、1897年から1909年までは実に16%の高配当を維持してきたのである。こうして、20世紀初頭にはシベリア商業銀行はロシアでも第一級の優良銀行と見なされるようになっていた。繁栄した銀行と合同して危機に瀕した露清銀行を救済することを考えていた露清銀行代表取締役A. I. プチロフにとって、シベリア商業銀行はまさに恰好の合併相手と目されたのである。

しかしながら、シベリア商業銀行の経営陣は、人気のない露清銀行とシベリア商業銀行との合併の噂が流れただけで、シベリア商業銀行の株主の間でパニックが発生し、シベリア商業銀行株の売却を引き起こすことになろうとして合併に否定的であった。シベリア商業銀行は小さな銀行（資本金1000万ルーブル）だが堅実に経営され、これまでと同様の配当金を着実に分配しているのに、「公衆、証券取引所、顧客、銀行家の目には二流の銀行と見なされている」露清銀行と合併して何になろう、と。かくて、露清銀行の再建策（救済策）としてA. I. プチロフによって入念に画策された露清銀行とシベリア商業銀行の合併案は、1909年10月には完全に流産してしまうのである。

そこで登場するのは、M. ヴェルストラエトによる露清銀行と北方銀行の合併案である。満を持していた両銀行取締役M. ヴェルストラエトは、1909年11月初めにフランス資本が優位の2

銀行（露清銀行と北方銀行）を統合する案を構想することになる。

（2）北方銀行と露亜銀行の設立

北方銀行は、1901年9月18日に資本金500万ルーブル（1333万3000フラン）で——額面375ルーブル（1000フラン）の株式13,333株発行された——ソシエテ・ジェネラルの子会社としてサンクトペテルブルクに設立された。創設者（銀行）は、ソシエテ・ジェネラル、銀行預金会社（パリ）、ルイ・ドリゾン〔Louis Dorizon〕（ソシエテ・ジェネラル支配人）、エリー・ドワッセル男爵〔baron Héry d'Oissel〕（ソシエテ・ジェネラル副頭取）、N. S. アヴダコフ〔N. S. Avdakoff〕（鉱山技師）、M. ヴェルストラエト（露清銀行取締役）、V. V. ジュコスキー〔V. V. Joukovsky〕（鉱山技師）、アドルフ・ヴェルト〔Adolphe Werth〕（商業顧問）であった。銀行の経営陣については次のとおりであった。取締役会〔Soviet〕頭取は、エリー・ドワッセル男爵、取締役は、ルイ・ドリゾン、M. ヴェルストラエト、ロベール・サロメ〔Robert Salomé〕、エルネスト・デュラン〔Ernest Durrant〕、アドルフ・ヴェルトであり、経営委員会〔Pravlenié〕メンバーは、V. V. ジュコスキー、L. ロシュラン〔L. Rocherand〕（ソシエテ・ジェネラル）、オントシュコフ〔Ontschoukoff〕、ミカイロフ〔Mikhailoff〕、ウシェーネ〔Euchène〕の5名であった。

北方銀行は、1901年10月1日に窓口業務を開始するや否や、預金銀行としての体裁を整えるべく、支店・営業所の開設と預金の獲得に着手した。同年12月に、当時苦境に立っていたペテルスブルク・アゾフ銀行〔Banque de Pétersbourg-Azov〕からモスクワ支店を始めとする10店舗を譲り受け、北方銀行の支店として開業した。これによって、北方銀行は一挙に大量の預金と顧客を獲得することができ、1902年末にはすでに預金額は560万ルーブル——その上、サンクトペテルブルク本店では、300口座に110万ルーブルの預金額——に達した。北方銀行モスクワ支店は、ポポフ〔Popov〕（食料品貿易商）、スタヘイエフ〔Stakheïev〕（ヴォルガの大穀物商人・小麦輸出業者）、シュヴェツォフ〔Schvetszov〕（茶大輸入業者）などの大商人に融資する一方、ロシア第一のフランス人絹織物業者クロード・ジロー〔Claude Giraud〕やロシア工業界で著名なフランス人大銅精錬・金属業者ジュール・グジョン〔Jules Goujon〕などと取引関係を深めることができた。さらに銀行は、重要都市のハリコフ——ソシエテ・ジェネラルによって設立された金融持株会社オムニオム〔l'Omnium〕の子会社企業（Goloubovka, Routchenko, Mikievka）に融資——、ロストフ、リバウ（リバウ輸出手会社によるアンヴェルス向け商品輸出に融資）、オリヨールに新しい4支店を開設し、1904年には合計15店舗（サンクトペテルブルク本店を含む）を擁するまでになった。H. ボナンによると、「北方銀行の支店網拡張戦略は、農産物取引業務に従事するためや工業事業に参画するために、とりわけ中央ロシアや南ロシアの大商業地に支店を開設して行くことであった。」それ故、ドネツ川流域地方やボルガ川流域地方への出店ばかりではなく、北方銀行が1908年にブロドスキー銀行〔banque Brodsky〕（1905年設立）を引き継いだ黒海沿岸都市オデッサ、アゾフ海に面するメリウーコリ、バルト海に面するリガなどの重要港への出店も進められた。さらに、ボルガ川幹線航路流域、ウクライナの鉄道駅、

ニジニー・ノブゴロドなどの定期市都市などへも出店された。こうして、18店舗もの新支店を開設した1908—09年の大いなる躍進後、北方銀行はヨーロッパ・ロシアに49店舗もの支店網を擁するまでに発展した。

事業の急速な発展によって、1903年に750万ルーブルの新株発行——額面375ルーブルの株式20万株の発行（発行価格417.5ルーブル）——によって資本金は1250万ルーブルに増資された。1906年には、パリ連合銀行〔BUP〕の協力を得て新株3万3333株が発行され、資本金は2500万ルーブル（6万6666株）と倍増した。

北方銀行は、親会社ソシエテ・ジェネラルの支援、経営陣の精力的な活動、支店網の拡大などによって、創業当初から急速な発展と収益を実現してきた。しかしながら、この発展は、1901—07年の政治的経済的危機的局面——金融・工業恐慌（1900—03年）、日露戦争と政府財政危機（1905年）、経済通貨危機（1906—07年）——に遭遇した。とりわけ、「1905年の危機は北方銀行を揺さぶった。不安な預金者は預金を引き出し、多数の債務者は返済を中断した。主要支店は、首都との連携が途切れ、全支店で欠乏している大量の資金を保持していた。北方銀行は危うく倒産しそうになり、ソシエテ・ジェネラルの資金調達によって辛うじて生き延びることができた。」事実、ソシエテ・ジェネラルは、「北方銀行がロンドンや他の市場に振り出した大量の手形を再割引して、1905—1906年に北方銀行に大量の資金を調達してあげねばならなかつた。」こうした危機の影響により、銀行は多大な損失の償却と同時に銀行経営の刷新を行わねばならなかつた。こうして、1906年にパリ連合銀行〔BUP〕による北方銀行への資本と取締役員の参加が実現して、北方銀行も立ち直ってきたが、ロシア当局や実業界の目には、北方銀行はフランスの2銀行（SG, BUP）にあまりにも従属した単なる子会社に過ぎないと見なされるようになった。結局、北方銀行は、特に1909年以降ロシアに訪れた好況によって業績が改善していたとはいえ、1905年の財政危機、それに続く1906～07年の経済通貨危機の到来で、ロシアの商工業に資本を大きくつぎ込んでいた事情が見て取れる。こうした事情を背景として、露清銀行とシベリア商業銀行の合併計画の頓挫を知った北方銀行・露清銀行取締役M. ヴェルストラエトは、1909年11月に北方銀行と露清銀行との統合案を作成した。

北方銀行と露清銀行の合併交渉は、露清銀行とシベリア商業銀行の合併案が流産した直後の1909年11月の初めからM. ヴェルストラエトとA. I. プチロフの間で開始した。実際、1909年11月14日付けの覚書で、M. ヴェルストラエトは、「北方銀行と露清銀行の合併は2銀行の株主がそれぞれの株式交換において如何なる損失も被らないのでなければ不可能である」との所見を述べ、「北方銀行株は人気上昇しているが、露清銀行株は逆に下落している。最近の露清銀行株上昇は問題となっていた〔露清銀行とシベリア商業銀行の〕合併計画に起因するものである」と指摘して、「北方銀行の資産は2650万ルーブルである」ので、「北方銀行の株主は、4株に対して新銀行株5株を受け取ることになろう」と算出した。こうして、M. ヴェルストラエトは、1909年11月22日に露清銀行と北方銀行の合併計画を示し、11月26日に北方銀行の親会社ソシエテ・ジェネラルの中央経営委員会で承認されたのである。そして、11月30日にはパリに露清銀行代表取締役A. I. プチロフを迎え、Ed. ネツラン（パリバ、露清銀行）、A. ベナック〔A. Bénac〕

(パリバ)、A. スピツァー〔A. Spitzer〕(ソシエテ・ジェネラル)、マンヴィエル〔Minvielle〕(ソシエテ・ジェネラル)、G. ランドル〔G. Raindre〕(露清銀行)、M. ヴェルストラエト(北方銀行、露清銀行)らが出席した会議が開かれ、新銀行(露亞銀行)の資本金、積立金、定款などについて討議された。翌12月1日にも同様の会議が開催され、新銀行の資本の配分などが決定された。

最終的に資本金は3500万ルーブルと決定された。資本金は額面187.5ルーブル(500フラン)の株式186,666株に分割され、積立金を考慮すると、株式の真正価値はおよそ278.60ルーブル(725フラン)とされた。そして、この186,666株は次のように配分される。

- 1) 北方銀行の株主は、露亞銀行の株式93,332株を受け取る。すなわち、北方銀行5株と露亞銀行7株が交換される。
- 2) 露清銀行の株主は、露亞銀行の株式60,000株を受け取る。すなわち、露清銀行4株と露亞銀行3株が交換される。
- 3) ロシア政府は上海両株1万5305株と露亞銀行株8,609株が交換される。
- 4) 上海両株695株の保有者と391株の露亞銀行株が交換される。
- 5) 露亞銀行は新株24,334株を発行する。発行価格は1株当たり745フランとなろう。

1910年6月27日に合併に対する皇帝ニコライ2世の裁可を得、1910年8月12日にロシア蔵相が認可した定款に従って、露亞銀行〔Banque Russo-Asiatique〕は設立された。1910年10月には、主としてソシエテ・ジェネラルとパリバによって露亞銀行の新株(24,334株)は販売された。露亞銀行の全ての資本(株)取引が終了したとき、ソシエテ・ジェネラルは総株数(186,660株)のうち148,585株(80%)を集め、売り捌いた。そして、同銀行によると、そのうちの117,034株、つまり露亞銀行株式資本の62.7%がフランスに存在する結果となった。

主としてヨーロッパ・ロシア(中央ロシアや南ロシア)に支店網を展開する北方銀行とアジア・ロシア(トルケスタン、シベリア、極東)に支店網を展開する露清銀行との合併は、それぞれの支店網を補完し合う関係にあったので、ある意味では合理的結婚(当然の成行き)だったと言えよう。こうして、フランスのソシエテ・ジェネラル=パリバ・グループは露亞銀行というロシアでも第一級の金融機関を擁することになったのである。